

## 10代の子どもへの鑑賞教育 ～学校・美術館・アーティストの協同を目指して～

美術科 中馬 真里亜

### はじめに

創作と鑑賞における、生徒の行動の移り変わりを記録しながら、10代の子どもへの美術のアプローチ方法を考察する。

表現したい欲求が高まる生徒達や、劣等感を抱いて表現から離れる生徒達は、授業において心の移り変わりに応じ創作と向き合う。創作は、人間の心と関わるものであるからこそ、取り組む生徒の心情を汲み取りながら展開していく。

10代の子どもの成長は、自分の感覚に素直に、持ちうる技を磨きながら表現できる完璧な道筋ばかりではない。自分を見せたい、伝えたい気持ちや、見せたくない、伝えたくない気持ちが多様にあり、美術においては、自分を映し出す創作に抵抗を感じる生徒も存在する。

成人として自己を管理し、創り出す側になるべきことを示唆する社会の中で、中学校教育は、子どもが自他の関係を見つめ、困難で忍耐が必要な課題を克服し、段階を乗り越えていく行動を支援する役割を担う。それを受けて中学校美術では、自分の気持ちを開放して創作する時間や、秩序を理解しながら理論的に創作する時間などの、感情や思考のコントロールを促す題材を提供する。そして、出来上がる作品の美しさをはかることを超えて、それを創作した人間の魅力を感じ合えることに、教育目的を傾けている。

美術という窓から10代の子どもに働きかけることができる場所は他にもある。学校から外へ目を向けると、文化施設の取り組みや、地域の行事、福祉施設の事業、企業が行う体験活動など、子どもを対象としたアートイベントは多様にある。このような、創ることを通して人の交流を図ることを重視する取り組みについては、10代の子どもへの影響力が期待でき、理想的な形である。ただし、今回は教育プログラムの検討の観点から、特に子どもの教育に主眼を置いて活動を実施する場所に焦点を当てて考察したい。

そこで、美術館の事業について取り上げる。美術館の役割とは、主に資料の収集と保管、展示である。そして近年になり、教育普及活動が登場した。教育普及においては、美術館毎に来館者や団体に対して独自の教育活動を行っている。講義形式だけではなく、人々の創作活動等を取り入れ、幅広い内容で鑑賞体験をする機会を提供している。

美術館は教育の対象を広く設定することが可能であり、目的に応じてプログラムの対象年齢を変化させることができる。一方、10代未満の子どもや成人を対象とする活動が多い傾向にあり、その結果10代の若者に向けられたプログラムが少ないことが問題視されている。10代の子どもが美術館を積極的に活用し、美術館の事業に参加する姿勢が向けられにくい現状を鑑みた上で、対象年齢を検討する美術館が増えている。また、来館者と作品を結びつける場として、しばしば作品の制作者を事業に招き入れる。制作者はアーティストとしてメッセージを伝えることや、来館者と対等な視点で考えを交流することを通して、対話を実践する。その機会や、展開される対話をコーディネートすることが、教育普及が担う役割の一部である。

制作者が作品を発表することや、来館者と共に活動することを目的として美術館を訪れる場合がある。作品を通して、10代の子どもに対しメッセージを伝え、表現世界へ導く構想を持つ制作者は多く存在し、特別な環境を整えば、子どもはそんな制作者に出会うことができる。

授業において、10代の子どもと作品とのつながり方を検討することを出発点として、美術館のコーディネート力を借りながら、アーティストの作品が、子どもの成長に意義ある影響を与えることが可能な環境について考察する。

筆者は中学校教育を実践する立場として、10代の子ども（特に13歳から15歳を対象）に鑑賞教育を行う。その実践報告と結果の考察をもとに、学校美術と美術館やアーティストの協同について論じる。

## 1 学校美術のアプローチ

### (1) 表現とテキストによる生徒の行動化

美術の授業は、心理的な成長に対応したテーマ選択や、技能面の成長に応じて題材内容を検討している。以下、3年生の生徒の行動化について考察する。

3年生では、1学期当初から人物クロッキーを実施した。体の動きやボリュームなどを短時間でとらえるムービング<sup>i</sup>という手法を利用して、3分～5分程度で様々なポーズを描く活動を行った。ペアやグループ内でモデルを交替して、短時間で体の動きを変えていく。観察して描く側は、連続した大きな動きのある線を重ねながら、全体から部分へと形にしていく。慣れてくると、モデルになる人のポーズもおおらかになり、よりダイナミックな姿を見せる。描く側も、肩から腕を大きく動かして、大胆な線を重ねるように変化する。

人の姿を描く時に、顔の表情や手足の位置、服の感じなど、情報が多く混乱する生徒が多いが、クロッキー表現のムービングという手法は、細部にとらわれずに、人の動きを記録することに主眼がおかれるため、人物の個のイメージよりも、総合的な人の形をとらえることが可能になり、生徒は抵抗なく取り組んでいた。また、一本の線に慎重になり過ぎるあまりに、時間がかかることが直観的な知見を減らしてしまう懸念についても解消することができた。

人の姿を改めて観察して描くことに少なからず抵抗を抱く傾向を考慮し、生徒がより積極的に人の観察に迫ることができるようにすることが授業のねらいである。時間をかけて細部の変化を感じ取る効果をあえて目的にしない。

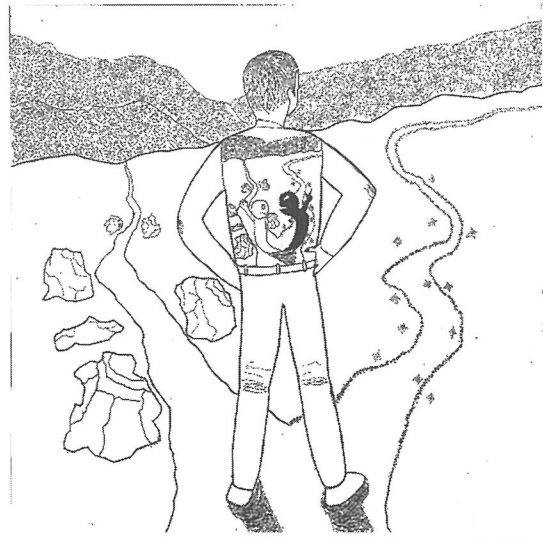
その後、「人」をテーマにした絵画や彫刻の鑑賞を交えた。ピカソが年齢を増すごとにどのように人物描写を変化させたのか、レンブラントが生涯にわたり自画像を描いたのはなぜかなど、画家と人物表現の関係について学習した。そして近代から現代にかけて展開した、人物の姿形を多様に表現する活動についても触れた。

授業の後半は、黒いサインペンを用いた絵画表現を基本に、各自がとらえた「人」の姿を表す内容に展開した。サインペンを用いた表現は、点や線の細密さと、黒の濃淡で見せること等の特有の魅力があり、抽象的な記号の集合体に意味を重ねる表現に発展できる。生徒はそのよさを自分の作品に取り入れながら、人の姿の表し方を模索した。

以下生徒作品を紹介し、制作した後に記録した生徒のことばを原文のまま紹介する。

#### 作品A タイトル「わかれ道」

人はいつも2つのわかれ道の前に立たされており、選択をせまられています。とても小さな選択から大きな選択までいろいろありますが、2つの道はそれぞれ特徴があります。左の道は、最初は苦しいように見えますが、先の見通しはよく、はっきりと確実性があり、待ち受けている将来も楽しいもの。そして右の道は、最初こそ光っていて魅力的に見えますが、先がどうなっているかわからず、不安定でさらに将来もとげとげしいもの。そのどちらを選ぶか絶えず闘っている人の心を表すため、人の中にもう一つ絵をかきました。また、どうしても最初が楽に見える道を選びたがる傾向が人にあるので、右を向かせています。

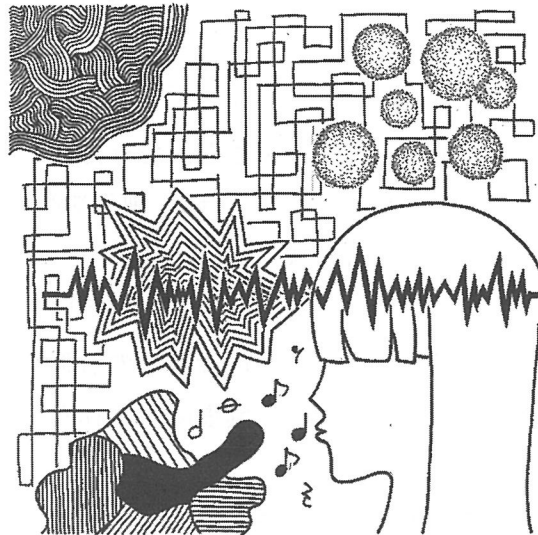


作品A

どうしても最初が楽に見える道を選びたがる

#### 作品B タイトル「口笛」

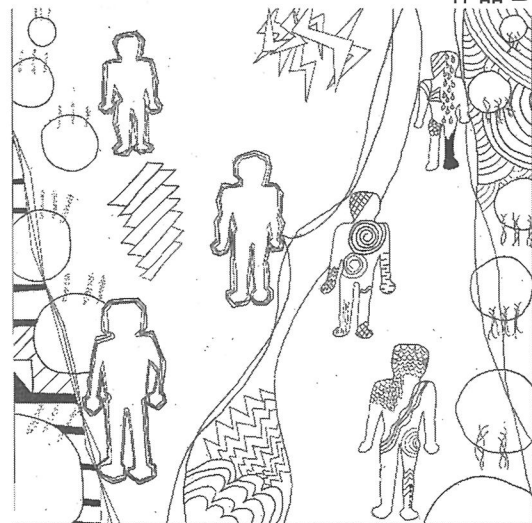
左上に恐怖、右上にやわらかく、あたたかい感情、左下にこみ上げてくるような不安や人を疑う気持ち、全体に1本の直線を交差させている、普通の気持ち、そして中央に、普段の平凡な毎日や負の感情をふきとばしてくれる、喜びや嬉しさの感情を表現しました。人のなかにある感情を表すために、いろいろな思いがこめられて作られている歌を中心に表現しようと思いました。



作品B

#### 作品C タイトル「街行く人々」

普段普通に行きかっている人たちをかきました。前に向かってくる人々は、体を固いからでおおわれているが、後ろから見たら、人の心を写し出している(不安やいかりなど)。つまり、みんな心を見せなくて、バリアをたくさんしているけど、うしろから見たら、見え見えで、みんな色んな気持ちをうずまいて生きていることを表したかった。



作品C

作品内容から、人を「希望や夢の象徴」として表すことともに「苦悩や葛藤の象徴」として表す傾向も強いことがわかる。10代の子どもが人について考える際、成人として認められる以前の不安定な位置に対する数々の心理描写が作品に反映されている。

さらにここで取り上げたいのが、高学年になるにつれてイメージの言語化が多様に変化し、説明することの意義が深まる点である。

作品Aは計画的な構図と暗示するモチーフの効果的な配置が成立している。しかし制作した生徒は事前の言語記録による計画は立てていない。テキストから出発せず、鉛筆を持つ手が動くことを出発として、2つの道の輪郭線の違いや、中央の人物の立ちふるまい方、人物の中に描かれた善悪のかたちを具体化した。言語による説明がし難いからこそ、描く行為によって導かれた答えだと判断できる。

作品Bは、線描の違いを、感情の違いとして解説している。制作した生徒は、黙々と様々なタイプの線を描き、その中から、自分で選択して配置していた。恐怖や喜びなどの視覚化できないものと、視覚に訴える線を結びつけた行為によって、制作者は自分の中にある感情の存在を整理でき、その位置関係を視覚化することに成功した。そして最終的にことばによって解説することで、自分の思考の過程をたどることが可能になった。

作品Cの制作当初、生徒は人の感情の表裏をテーマに挙げて何を描くか悩んでいたが、前に向かってくる人の正面の姿と、向うに進んでいく人の後ろ姿の群像によって、感情の視覚化にたどり着いた。行き交う人々の動きを表す描写によって、最終的に人の感情の現れ方に対する自分の考え方を導きだすことばを選ぶことができた。

作品と共に制作者のことばは、創作活動を経て改めて真実味を持つ。主観的な見解だけではなく、世界に対する知識理解を経た上で自分や他者を観察する高次の思考力が、表現に浸透されている状態である。作品が全てであり、ことばは不要であるという見方ではなく、ことばにならない価値が作品として具体化され、作者はその活動を経てことばを獲得することに注目したい。この過程が、10代の子どもにとって慎重に扱われるべき点である。

## (2) 鑑賞教育の必要性

学年が上がるにつれて、人や物事に対する認識が複雑になり、その表現方法が単純明快なものにならず葛藤する時間が生まれる。しかし、自分の意志をもって必要なものを選択して形になった作品は、生徒自身の葛藤の克服が可視化されたものとして残ることになる。

前述した生徒作品と作者のことばの関係からわかることは、美術は知覚される現象のみならず、付随するテキストや制作者の行動の理解によって、実態を鮮明にしていくということだ。

10代の成長過程で獲得するテキストの理解力や多面的な認識力によって、より美術の本来の姿に迫ることが期待できる。それは、造形あそびに代表される感覚の表出とは異なる魅力を持つ。思想を深めて世界の真実に迫る心の動きをなぞるような創作活動が、10代の子どもの思考力にはふさわしい。そして成長の変化を作品とテキストによって交流することによって、成人として生きることへ希望を抱き、強い意志を育む助けとなると考える。

表現と関連するテキストの存在は、鑑賞教育で大変重要な意味を持つ。テキストの理解により、

作品の受容の仕方はさらに深まる。作品が視覚的に意味を成すだけのものではないことに気づき、作品から放出される意味内容の広がりを目を向けることが可能になるのだ。

このテキストの理解力や活用力が、10代の子どもに高く期待できる力である。また、その力を子ども達が自覚し伸長できることがその後の精神的な成長を助長すると判断される。美術の表現活動とともに、鑑賞教育を通してテキストの活用力を鍛える取り組みを実践していきたい。

## 2 美術館のアプローチ

### (1) 教育普及について

美術館の教育普及事業の調査を目的に、2012年に東京の国立美術館3館、2013年に関西の国立美術館2館を訪れた(調査内容は本校研究紀要第51集参照)。各美術館の教育普及の方法や活動内容(代表的なもの)を表にまとめる。

美術館	教育普及の方法	主な活動内容
東京国立近代美術館	対話によって子ども達の考えを引き出すギャラリートークを基本に実施している。スクールプログラムには、美術館側が手配したボランティアスタッフが関わる。子どもが美術館内で制作する内容のプログラムは実施していない。過去に学校との連携事業実績がある。	ボランティアガイドスタッフによるギャラリートーク、「トークラリー(こどもが好きな作品の前でガイドスタッフと対話できる活動)」、「こどもセルフガイド(15歳以下対象)」配布、学校団体へのギャラリートーク、鑑賞教材の貸し出し、教員向け鑑賞会
国立西洋美術館	学校ごとの申し込み制でボランティアスタッフが対応するギャラリートークが中心である。1997年に「こどものための美術展」開催。	「スクール・ギャラリートーク」、「ファミリー・プログラム(子どもと保護者対象)」、子ども用鑑賞ガイド「ジュニア・パスポート」配布
国立新美術館	公募展を中心とする美術館なので、アーティストを講師に招いてのワークショップが中心である。	アーティストが進めるワークショップ(絵画、彫刻、プロダクトデザイン、グラフィック、ファッション、ダンスなど)
国立国際美術館	教員向けの美術館活用ガイドが存在し、年間の実施計画がはっきりしている。用意されたプログラムを組み合わせる形で学校の要望に対応している。セルフガイドの形態は充実しており、過去の団体鑑賞活動実績も豊富である。	ギャラリートーク、「ジュニア・セルフガイド(小中学生対象)」の配布、「こどもびじゅつあー(1か月に1度の割合で実施する小学生のための対話を通じた鑑賞会)」、ワークショップ(年に4回、美術科・教育研究者・美術館関係者を講師として行う)

京都国立近代美術館	「学習支援」という名称で鑑賞活動やワークショップを実施。美術館から体験内容を提案することだけではなく、各学校や団体が美術館で体験したい要望を聞き取りながら、プロジェクトを立ち上げる。一般参加者が美術館を効果的に利用できるようにコーディネートする立場として活動を提案する。	個人・団体の希望を反映したギャラリートークや鑑賞会、市内小学校教員を対象に図画工作科における鑑賞教育の充実のための講座、展覧会関連イベント（対話を通して企画展の作品鑑賞を行う、企画展の内容に関連した独自のワークシートを取り組む、展示作品の表現に関連した作品制作をするワークショップを行う）
-----------	---	--

今年度は、美術館の教育普及（学習支援）の取り組みを、実際に本校生徒が体験し、その記録をとることを目指した。また、学校の授業という個別の取り組みに対して、美術館がアプローチできることはどんなことか、そして、授業のねらいを達成するために美術館をどのように活用すべきなのかを検討するために、学校と美術館の連携活動を計画した。

## （２）京都国立近代美術館の学習支援

生徒の活動を深める取り組みを美術館で行うことに、理解と協力の意を示したのが、京都国立近代美術館の学習支援を担当する、朴鈴子氏である。

年度当初、本校に近い国立美術館ということで、先に国立国際美術館へ相談をさせてもらったが、館の運営上、学校独自の要望に応じる形がとれない点で連携不可となった。次に京都国立近代美術館に相談した結果、朴氏から「来館者に館の魅力を理解していただいた上で、最大限活用してもらう為に、個別の希望に対応しながら、取り組みをコーディネートすることが目的である」との説明を受け、協力が可能であると判断された。

あわせて、学習支援活動として、授業の方向性や生徒活動の展開に対して学校教育としての意義が明確であり、主体的に企画立案をする動向がわかる場合に対し、協力ができるということを強調している。企画立案を全て引き受けることが目的ではないことをここでおさえておきたい。

過去の事例の紹介から、京都国立近代美術館の学習支援の基本方針として、美術館の活用を渴望している団体に対して、オリジナリティーのある活動づくりに協力するという点がわかる。もちろん、展覧会事業を主とする美術館にとって、個別の企画を複数抱えるには、物理的な課題も多いことが想像される。しかしながら、教育活動や市民との関わりに積極的な姿勢の研究員の存在によって、ますます美術館の活用方法が広がり展開しているのだ。今回、美術館の研究員の方々が、来館者の求めるものに能動的に迫る事実を鑑みて、美術館と学校の連携の可能性を大いに感じる事ができた。

ここで、美術館と学校の在り方への洞察として、金沢21世紀美術館の開館5周年シンポジウム「ミュージアム・エデュケーション21」での鑑賞教育についての講演内容を紹介する。長田謙一氏は次のように講演する<sup>ii</sup>。

美術館が新たな美術館として努力すると同時に、学校もまたその学校に即して、例えば学校の教師たちがみずから美術そのものの生きる力にとっての意義を理解し、その生きる力にとっての芸術の意義をみずからもまた背負って生きるということがまず出発点に必要であろうし、そのことにかかわって、教師自身が美術のいわば再定義の営みの中に飛び込んでいく必要があるかと思えます。そのような美術館側と学校教師の側のいわばクリエイティブな営みが前提とされるときに、学校と美術館というのは、幸せな関係を結ぶことになるのではないかと思います。

学校と美術館の協同が、どちらかが受身になってしまうのではなくて、両者が能動的に美術の根幹に向き合って、互いの領域を往来することによって達成できる可能性があることを示唆している。過程を検証していく中で、京都国立近代美術館の学習支援活動との連携事業の目的が明解となった。

### (3)「美術館でギャラリートークを聞こう」活動報告

昨年度の研究授業で、生徒が自分の作品や他者作品について語り合う場を設定したが、発言内容の深化の点で課題が見られた。そして今年度は、作品とテキストの関わり方についての改善を目的に授業を構想した。

そこで、生徒がテキストに迫る鑑賞教育を美術館で体験することによって、美術作品やその作者、学芸員からの学びを授業に還元できないか検討するに至った。

京都国立近代美術館の学習支援によって、授業で子どもが作品について語る活動に効果が期待できるプロジェクトの計画を立てた。

#### 美術館鑑賞活動実施要項

##### 目的

##### ○美術館鑑賞活動を通じた感性と社会性の育成

- ・美術が、様々な学術や社会情勢、人々の関係性等の日常生活における課題と深い関わりを持つことを知り、幅広い視野で学ぼうとする意欲や態度を育む
- ・アーティストの発想や表現と出会い、創造活動に対する自主性を育む
- ・多様な見方や考え方、表現を知り、多くの人と関わっていこうとするコミュニケーション力を高める

##### ○美術の授業と美術館の鑑賞活動の連携教育研究

##### 場所

京都国立近代美術館（1F 講堂、3F 企画展会場、4F コレクション・ギャラリー）

##### 内容

##### ○美術作品鑑賞活動

アーティスト・やなぎみわさんによる作品解説、学芸員によるギャラリートーク、  
作品鑑賞

##### 日程

平成25年9月9日（月）3・4・5・6時間目

前述した授業の課題に対して、朴氏と相談した結果、子ども達が学芸員や作家の作品についての語り方の多様性に触れ、語り手の見方や作品への理解がどのようなテキストとなって現れるのかを知ることを目的としたギャラリートークを展開することにした。

今回取り組みを実施する時期に、美術館では企画展「映画をめぐる美術」展が開催されることになっていた。そこで朴氏が、出品作家であるやなぎみわ氏にこの取り組みを紹介し、やなぎみわ氏が参加の意向を示した。美術館側の積極的なアプローチに大変感謝している。やなぎみわ氏の活動については、3章で触れる。

今回この取り組みの対象は41人学級としたので、ギャラリートークの形態として、1名の語り手の声を聞き取れる人数に限界があるため、複数の学芸員の配置を必要とした。そして、授業の構成として、生徒を6つの班に分けて活動することにしたので、ギャラリートークの担当者は6人ということで話を進めた。

ギャラリートーク担当者とトークの対象になる作品について以下にまとめる。

ギャラリートークの担当者	紹介作品名	作品の作者名
美術館館長	孔雀	上村松篁
学芸員 A	うしろ姿のしぐれてゆくか山頭火	池田遙邨
学芸員 B	filem-filem-filem	ミン・ウォン
学芸員 C	子供	松本竣介
学芸員 D	作品	吉原治良
学芸員 E	ドビュッシー作品「前奏曲 I」のイメージより	伊砂利彦

館長柳原正樹氏も、今回のギャラリートークに参加したい意向を示された。ジャンルも日本画・洋画・工芸・写真ということで、偏りが無いように配慮された作品選出である。

当日の行程は次の通りである。

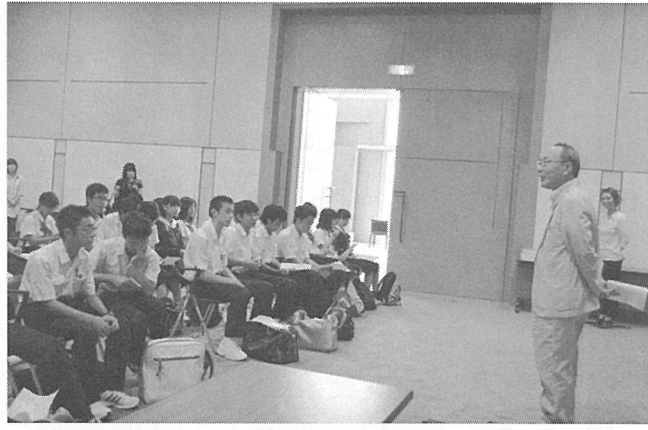
- 12:25 入館
- 12:40～13:00 講堂にてオリエンテーション（館長挨拶、基本的なマナーの確認）
- 13:00 「映画をめぐる美術」展会場へ移動 ピエール・ユイグ《第三の記憶》鑑賞
- 13:20 コレクション・ギャラリーへ移動 やなぎみわ作品鑑賞 ギャラリートーク
- 14:15 学芸員によるギャラリートーク① 学芸員 A・C・E
- 14:30 学芸員によるギャラリートーク② 館長 学芸員 B・D
- 14:40 自由鑑賞
- 14:50 講堂にてまとめ
- 15:00 退館

※本校から美術館までの移動手段はバスを利用した。





1



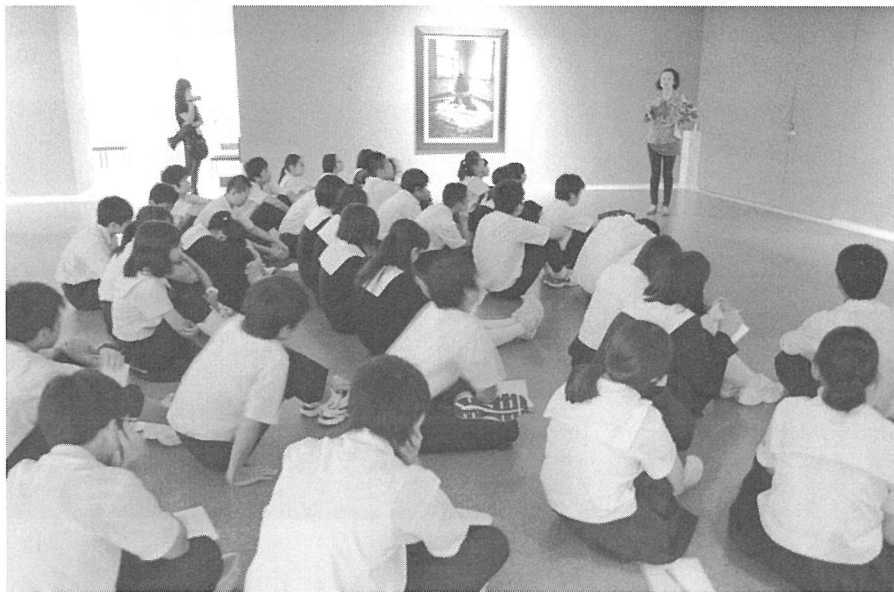
2



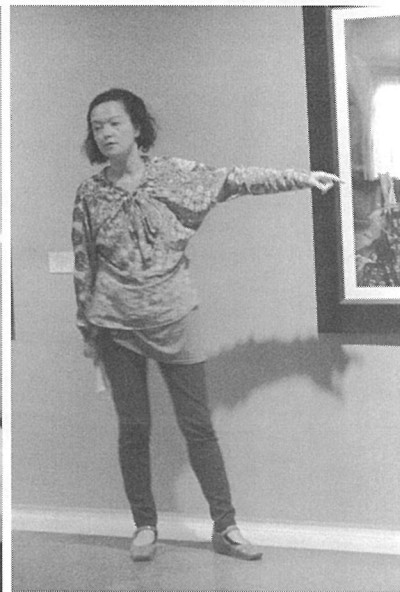
3



4



5



6

1. 京都国立近代美術館前記念写真（大阪教育大学附属池田中学校2年B組）
2. 京都国立近代美術館館長柳原正樹氏の挨拶
3. 学習支援担当朴鈴子氏による美術館の基本的なマナーのレクチャー
4. 「映画をめぐる美術」展会場 ピエール・ユイグ《第三の記憶》鑑賞風景
5. 6. やなぎみわ氏によるギャラリートーク風景



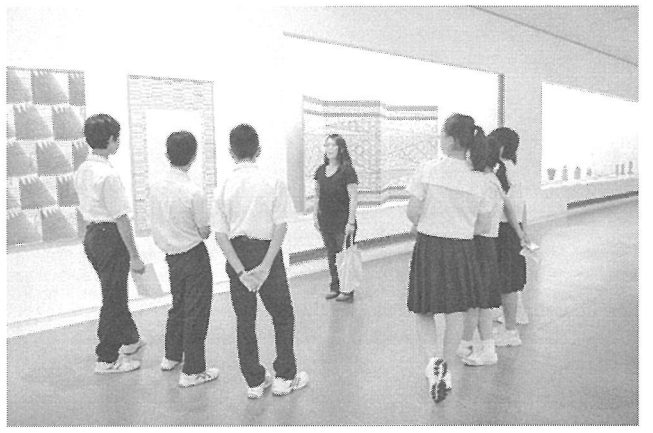
7



8



9



10



11



12

7.8. やなぎみわ《フェアリーテール》シリーズの自由鑑賞風景

9. 《孔雀》ギャラリートーク風景

10. 11. 《ドビュッシー作品「前奏曲Ⅰ」のイメージより》ギャラリートーク風景

12. 《うしろ姿のしぐれてゆくか山頭火》ギャラリートーク風景



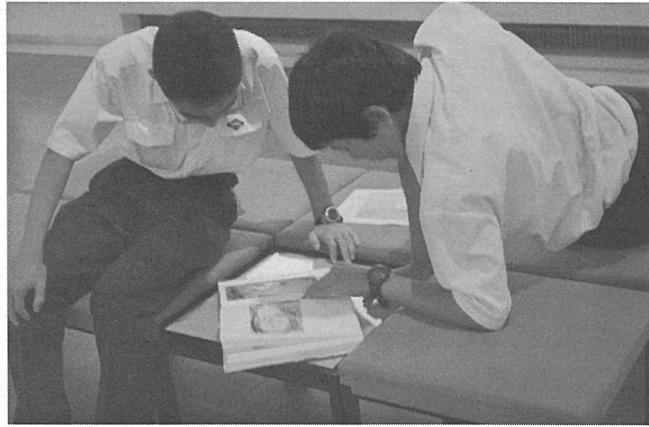
13



14



15



16



17

13. 《子供》ギャラリートーク風景

14. 《作品》ギャラリートーク風景

15. 《filem-filem-filem》ギャラリートーク風景

16. 17. 自由鑑賞風景

ギャラリートークは、作品の技法や手法の紹介や、作家の生い立ちに触れながら表現との関連に迫る解説、モチーフについて想像されることの対話等、学芸員の研究領域が反映された語りとなり、作品とテキストの関わり方の多様性を生徒は知る機会となった。

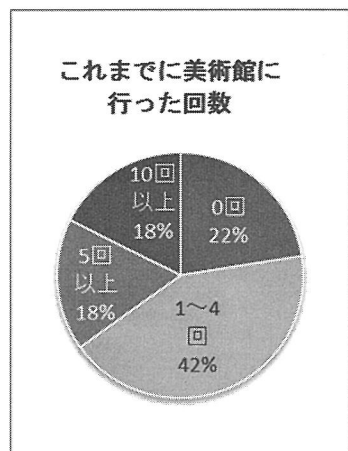
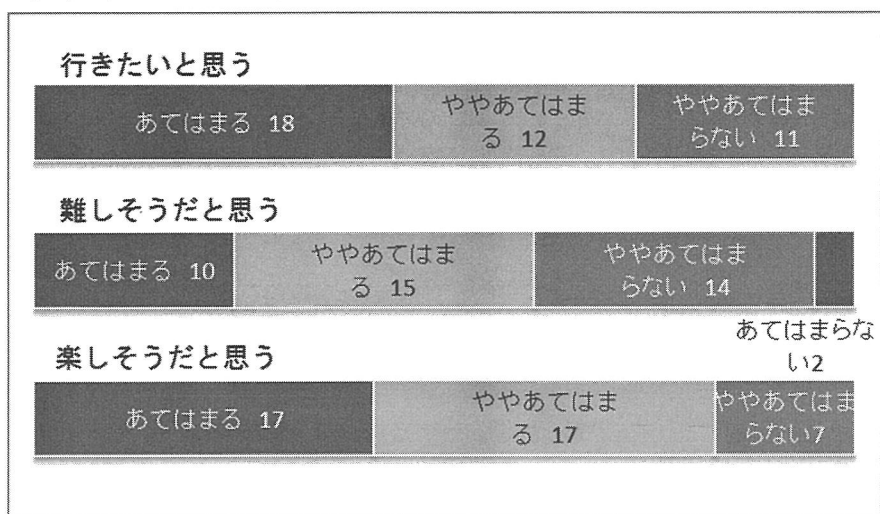
ギャラリートークの後の自由鑑賞では、作品の見方やモチーフにある情報を探る発言をしながら近隣の仲間と話し合いながら鑑賞する姿が見られた。

学芸員が提案した、例えば「技法や素材」「作家の人生」「モチーフからの想像」という見方は、作品そのものの視覚的な情報以外の、作品の背景に広がる意味内容に目を向けさせるきっかけになる。つまり、10代の子ども達が作品の見方捉え方を見つける活動を行うことによって、現実世界の意味内容を能動的に想像する力を育むことを助ける。

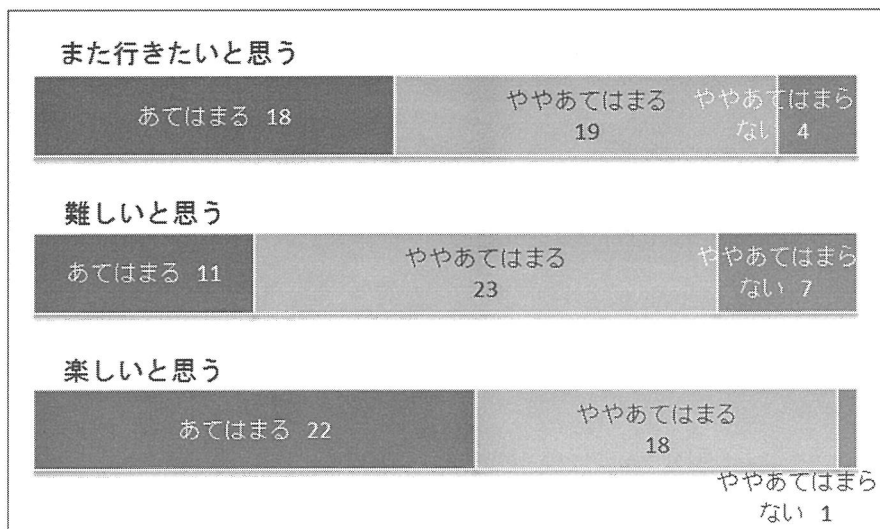
言語の獲得や活用、抽象的な事象を整理する思考、物事のプロセスを明解にしていくことに積極的な年代に対して、授業と美術館の場で可能な活動内容はもっと深く多様に発展できると期待を持てる機会となった。

**アンケート結果** (参加生徒41名からの回答、一部の項目を掲載)

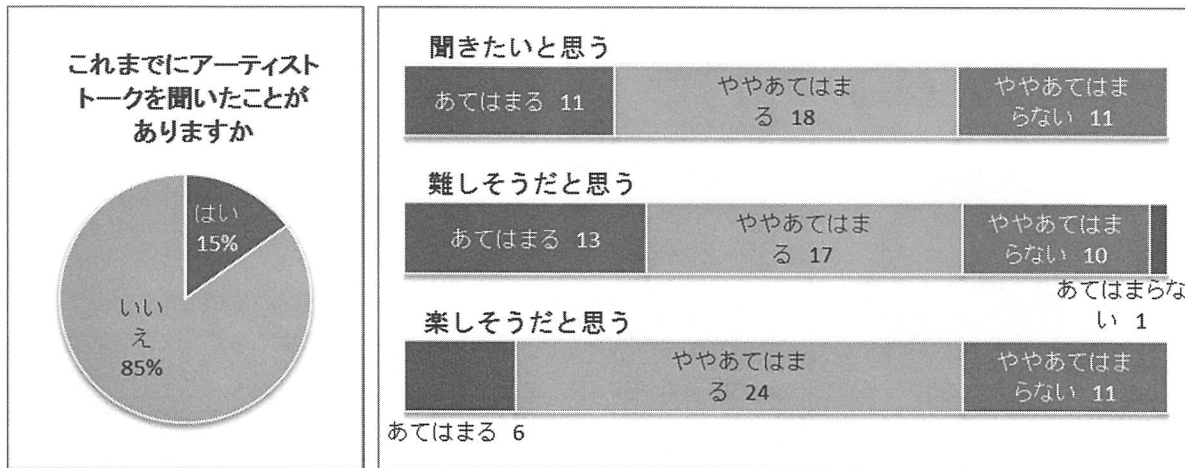
◆美術館について思うこと [事前アンケート結果]



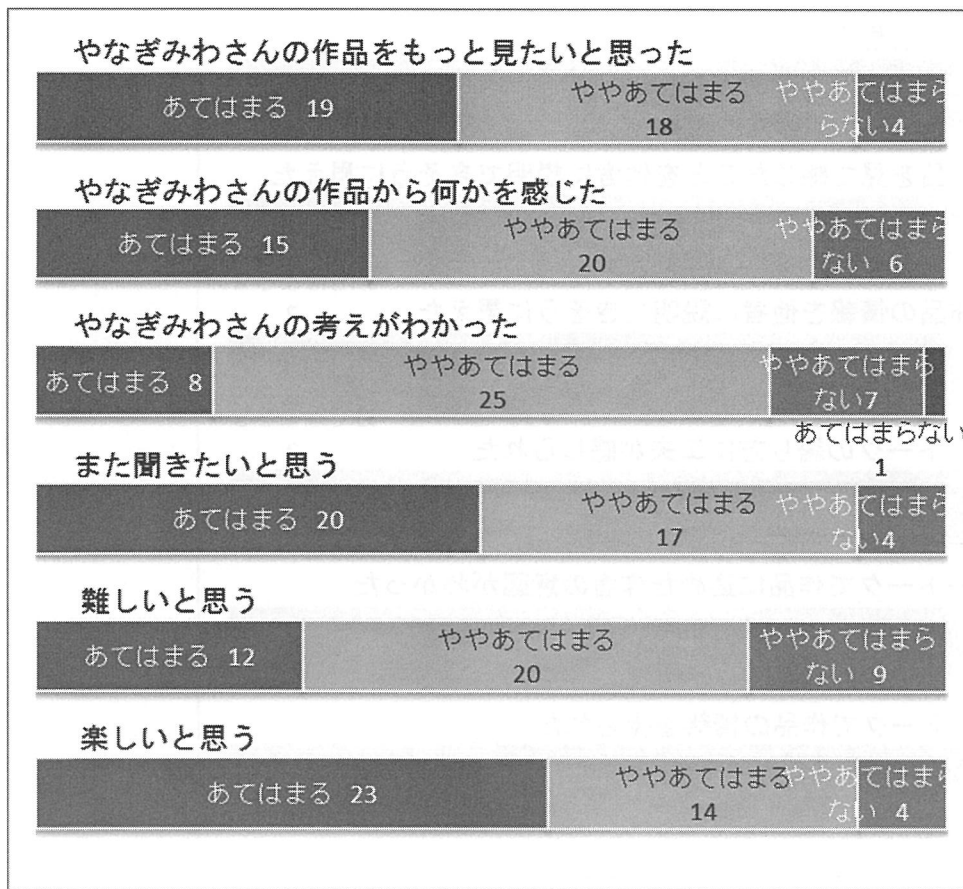
◆美術館について思うこと [事後アンケート結果]



◆アーティストトークについて〔事前アンケート結果〕



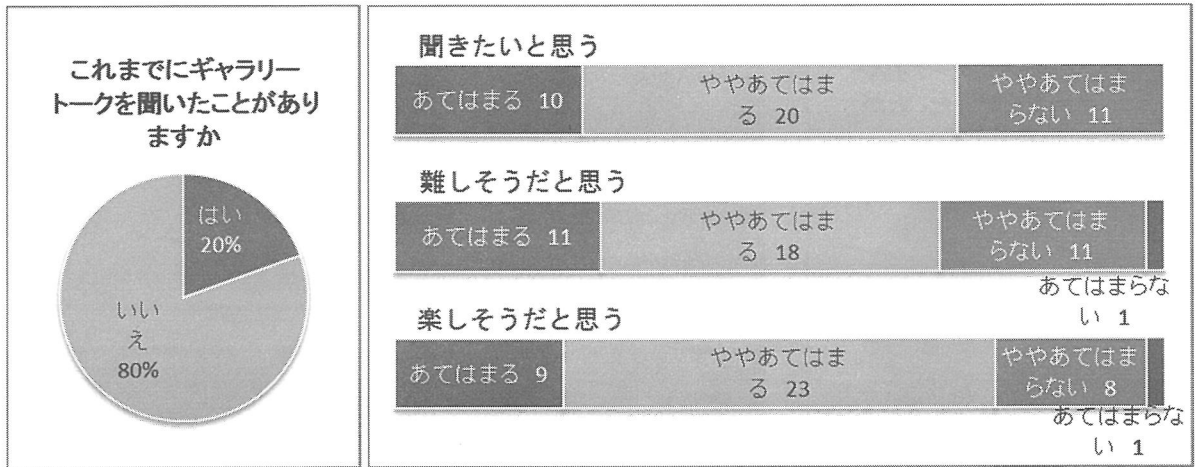
◆アーティストトークについて〔事後アンケート結果〕



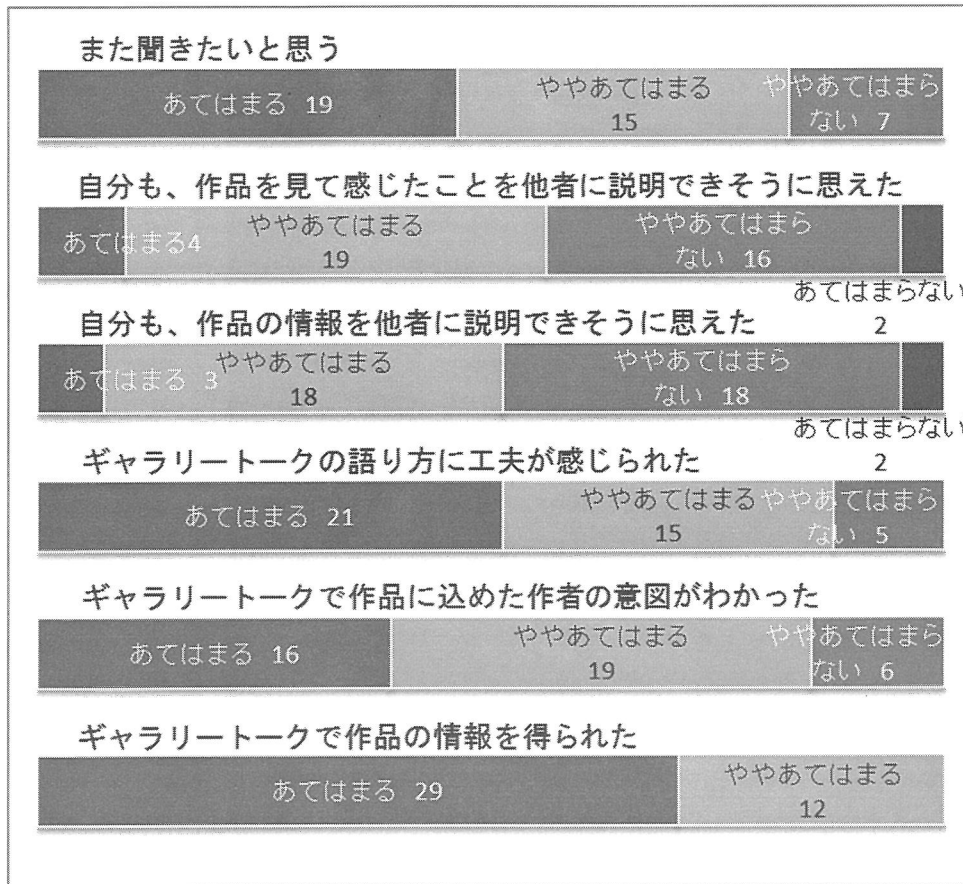
◆アーティストトークについての生徒感想（原文のまま掲載）

- ・普段は聞けないアーティストトークを聞いて、作った時の楽しさや苦しさを共感できた。
- ・やなぎみわさんの作品に感動したし、アーティストトークもおもしろかった。アーティストトークによって、新たな発見もありおもしろかった。
- ・やなぎみわさんの作品は、深い意味が込められていて、とてもおもしろかった。「赤ずきん」「シンデレラ」等他の作品も見たい。

◆ギャラリートークについて〔事前アンケート結果〕



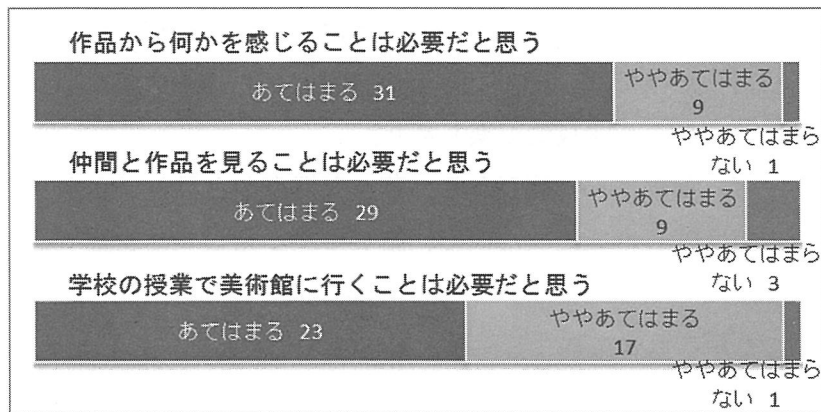
◆ギャラリートークについて〔事後アンケート結果〕



◆ギャラリートークについての生徒感想（原文のまま掲載）

- ・話を聞いたことで、作品の裏側にある作者の思いがどういうものなのか考えるようになった。
- ・美術館は見るだけで楽しくないと思っていたが、聞くこともできることを知った。
- ・思っていたのより美術館の作品をみるのは楽しいと思いました。1枚1枚それぞれの作者のおもいがなんなのか考えるのも楽しかったです。
- ・館長のギャラリートークが分かり易くて面白かった。

◆美術館活動について〔事後アンケート結果〕



◆活動全般についての生徒感想（原文のまま掲載）

- ・色々な作品を見るのが楽しかった。よくわからないものもあったけど、それなりにいろいろ想像できたので楽しかった。
- ・思っていたより、作品が少なかった。でも、各作品ごとに心を研ぎ澄ましたら、心に響いてくるものがあった。
- ・美術館に行ったのは、小さい頃に忘れていたけど、今回で美術館の印象がかわった。一つ一つの作品から何か感じた。
- ・友達と作品について評価しあえて色々な方向からものを考えることができよかったです。（たのしかったです）
- ・私はあまり日本画が展示してある美術館に行ったことがなかったのでおもしろかった。
- ・色々な芸術作品を美術館で見て、鑑賞した時の雰囲気から何かを連想して、名前みて、ああこれを伝えたかったんだなと気づくのが楽しかった。
- ・また、他の美術館に皆で行ってみたいです！よい体験になりました。
- ・美術館へ行くのは好きなので、とても楽しかったです。ギャラリートークやアーティストトークを聞いたのは初めてですが、作品についての理解を深めることができ、貴重な体験になりました。
- ・写真や絵など作るときに色々な工夫がされていることを知り、すごいなあと思った。
- ・前まで、美術館とかで絵をみたりするのは全く興味がなかったけれど今回行ってみるとおもしろいものだなーと思った。
- ・美術館は普段日常生活では感じることの出来ないものを感じられるとても素敵な場所でした。
- ・作品や展示物がずらりとあって、厳かなイメージだけど、意外と接しやすかった。
- ・なかなか難しい。
- ・すこし、美術館のよさがわかった。
- ・美術館そのものが「芸術」みたいな感じで、作品の並び方などもすごく工夫されていて（見やすい位置）スゴいなーと思った。
- ・作品を見ると、独特なもの見方で描いてあるものが多く、もの見方が広がったなと思います。

ました。とても面白かったです。

- ・美術作品からは、今まですごいとかきれいとかしかなかったけど、何かを感じれた。
- ・美術と言っても「絵」や「写真」だけではないので、その雰囲気をもっと感じたかった。
- ・初めて美術館に行ったが思っていたより開放的で楽しめた。
- ・美術館にははじめて行ったけど、たくさんの絵があり、色々な視点から見れてよかった。
- ・美術館に同年代の友達といくのははじめてだったので、話しながら見るのは新鮮で面白かったです。
- ・色々な視点から作品をみることがこれまで以上に楽しく作品をみれた。

### 3 アーティストのアプローチ

#### (1) アーティストトーク

やなぎみわ氏は、写真や演劇を中心に表現活動をするアーティストである。京都国立近代美術館の所蔵作品作家であり、「映画をめぐる美術」展で「フェアリーテール」シリーズを発表した。この作品は、「ラプンツェル」や「赤ずきん」などの童話をベースに、イメージされた世界を写真に表したものである。やなぎみわ氏は実際に部屋を改造し、砂を持ち込んだり、穴をあけたり、イメージに合う家具を配置するなど、童話の世界を創りだす。老婆の顔に特殊メイクされた少女をモデルにするなど、繊細な可愛らしさに同居した死生観が反映されたモノクロームの写真作品である。

アーティストトークでは、中学生時代からどのように自分のやりたいことを見つけて歩んできたのかを、周囲の人とのつながり方や、自分の意志を交えながら生徒に説明した。10代の頃の変化に富んだ興味関心の有様や、夢や挑戦についての自分の考え方、困難への向き合い方など、中学生の視点を思い返しながらか話を展開した。

作品を創る者の見方捉え方を知ることによって、生徒は目の前の作品の表面だけではなく、そのテーマが選択された意味や表現物の持つ力を体感する機会となった。

童話のような、小さな子どもの頃に触れた懐かしさが漂う世界とともに、そこにある恐怖、混沌などの暗い面が持つ美しさは、10代の思春期の感覚に近い。生徒の事後アンケートで、心に残る作品としてやなぎみわ氏の作品は多く選ばれた。

学校と美術館の連携によって実施するアーティストトークの目的は、アーティストの独創的な感覚を披露することではないと判断される。トークを聞く子どもの、どのような感覚に刺激を与えるべきかが明確になった上で企画されることに意味があると再認識できた。

#### (2) やなぎみわ氏のワークショップと授業

朴氏の協力によって、やなぎみわ氏の活動記録の資料やVTRを借りることができた。以下は、高松市美術館が発行するボランティア通信「しびのーと」<sup>iii</sup>の誌上ギャラリートークの中の、やなぎみわ氏のワークショップについての紹介文である。

「講釈」とは、講釈師がハリセンを片手に、威勢良く、軍記ものなどを朗読する芸のことです。参加者はまず、やなぎさんから講釈の歴史や内容に関する「講釈」を受け、その後、常設展「旅のはざまで一私はここにいますー」に出品されている作品の講釈づくりと発表に挑戦しました。



このワークショップでは、参加者（小学生から成人まで）が、選択した作品について他の参加者に「講釈」をする。作品の作者に扮して作品について語ったり、テレビショッピングの司会者に扮して作品を売り込んだり、詩人のように作品の物語を語る方法が多様に展開された。

語り手が演じることによって、作品の意味内容が深化していく現場の様子をVTRで確認したが、美術館でのギャラリートークの取り組み方に大きなヒントを与えるワークショップだと判断した。朴氏との相談によって、このワークショップを授業の導入で紹介し、生徒が作品を紹介する鑑賞授業を計画した。

授業の始めに、「講釈」する一般参加者の様子を紹介し、作品についての正しい知識や情報の獲得だけではなく、自分の想像力を加えることに意味内容が隠れている点に触れた。作品を前にして、つくり話をつくるのが、実は自ずと自分の無意識の感覚を言語化していくことにつながるということを授業のねらいとした。

筆者があらかじめ選択しておいた10作品の絵画の掛図を生徒が10分間鑑賞し、自分が注目した作品を1作品選んだ。その後、その作品についてのギャラリートークを20分で作成して、まずは4人程度の小グループで交流した。作品の前でグループのメンバーに伝える様子からは、美術館でギャラリートークを聞いたことを思い出して、学芸員のように行動している姿も見られた。また、作品の作者のように語る者もいた。作品について語ることの実演をすでに生徒は体験しているので、どのような行動が自分にできるのかをイメージしやすい様子であった。

最終的には、クラス全員の前でマイクを使ってギャラリートークを行うことを実施した。生徒のギャラリートークを以下原文のまま掲載する。なお、生徒が自分の感覚で説明している活動なので、内容の真偽は問わない。

アンリ・マティス《赤い食卓》

平凡な主人公の女の人が、何気ない日常に罪を感じ、自分を自分自身で縛り家にとじこめ、反省している様子が家の様子からわかる。窓の外から見えるピンクの家に遊びに行きたいという欲をも、家にとじこめている悲しい感じを表している。

フィンセント・ファン・ゴッホ《アルルの寝室》

この絵は1日の始まりの場所であり、終わりの場所でもある寝室を描いています。なのでこの絵には二通りの感じ方があると思います。朝の緊張や不安、夜の安心や解放感など、いろいろなことを考えられると思います。

U.G.サトー《Tredom “木は目を皿のようにしている”》

僕はとても緊張しています。一つの物を集中して見えています。鋭い洞察力もあります。しかしみんなにきらわれています。どうしたらいいですか。教えて下さい。

ピエト・モンドリアン《ブロードウェイ・ブギウギ》

電車の路線ににっていたから～形やカラフルな色 よく見るような、ビルの間に通る黄色い道路を青や赤の車が通るよう。規律に従い存在する赤青の小さな四角

## おわりに

学校、美術館、アーティストのそれぞれの場で行われる鑑賞教育が連鎖する取り組みを、計画的に実施できた面と、連携の過程で偶発的に実施できた面の両方を振り返り、活動がもたらす子どもの成長や変化を、今後整理していく必要がある。美術館が企画する学校連携プロジェクトは日本では盛んになっており、例えば金沢21世紀美術館が実施する「ミュージアム・クルーズ」<sup>iv</sup>は、教育委員会との共催事業として、金沢市内の小学校や特別支援学校の年間行事に含まれる活動になっている。プログラムの企画に向けては、学校関係者と美術館スタッフが一緒に検討する会議も実施されており、学校と美術館の意見交換を重要視している。

美術館の学校連携プロジェクトの多くは、小学校が対象になる。課外活動などの行事計画が柔軟に対応できる点や授業内容を総合的に展開することが比較的し易い点が理由に考えられる。対して中学校高等学校を対象にしたプロジェクトが比較的少ない理由は何か。美術を通したプロジェクトに積極的に10代の参加を求める取り組みも実際存在するが、そこに学校が協同する形態については、発展途上である。

鑑賞教育が、小さな子ども（10代未満）の純粋な感性に共鳴しやすく、彼らの発達に浸透しやすいものであるという認識は大いに取り上げられている。対して10代の子ども達についての、思春期に代表される、理屈っぽい、怠惰、反抗的、素直ではない等の認識によって、10代の子ども達は美術館の鑑賞教育から遠い位置づけになる傾向が生まれているのではないかと。

本章の考察により、筆者は10代の子どもへの鑑賞教育について、場と人と作品に変化と多様性のある循環したプログラムが必要だと認識している。その為に、学校と美術館とアーティストの各々の教育効果がつながるシステムをつくることが求められる。理由は、学校と美術館それぞれのできることで、できないことを補う形をより明解にすることによって、各々に展開していた教育活動の効果がより高められるからである。また、アーティストとの関わりについても、社会に生きる表現者の思想や信念が、作品という独立したものだけに宿るのではなく、場所や人に宿るべきものだという認識を教育現場でも重視すべきことだからだ。現実世界にどのように対峙していくか等、自分の意識を獲得する成長過程で求められるテキストの存在を鑑みるならば、テキストの受容や理解に富む10代の子ども達に、鑑賞教育を提供していく意味が見いだされる。

彼らは、喜びや感動を欲し、恐怖や不安をまとい、夢や希望に傾きつつ、退廃や絶望に迷う。独立を願い自分のアイデンティティを形成することにエネルギーを発揮できるその子ども達の行動化と、美術が提示する表現世界の意味内容が重なる点について、今後より研究を進めていきたい。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、京都国立近代美術館より、多大なご支援を賜りました。

<sup>i</sup> 高桑真恵『美術解剖学をデッサン・アニメ・漫画に活かす 人体クロッキー』マール社、2011年。

<sup>ii</sup> 金沢21世紀美術館『金沢21世紀美術館研究紀要』第5号、2013年、p14。

<sup>iii</sup> 高松市美術館ボランティア通信「しびのーと」2013年2月1日。

<sup>iv</sup> 金沢21世紀美術館『2012年度コレクション展 ミュージアム・クルーズ記録集』2012年。